

---

Baroque white n.m

Lioro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Baroque           white           n・m

### 【Nコード】

N6573J

### 【作者名】

L i o r o

### 【あらすじ】

#### 【人喰い】

夜な夜な人々が襲われる……  
母が喰われたあの夜。

復讐を誓うルース。

“やりたいこと”をやるジーマ。

“悪魔”を連れて目指すは

希望の  
“ 白 ”  
か、  
絶望の  
“ 赤 ”  
か

## プロローグ

### プロローグ

こんな時間に出歩いたのが悪かった。

蒼い蝶々を見たような気がして、母を外に連れ出した。

「危ないからだめよ、いつ【人喰い】が来るかわからないでしょ？」  
母と呼ぶには若すぎる年齢の少女。しかし、大人びた優しい声でルースをなだめる。

それでもルースは駄々をこね、叫びに近い声で、  
「だつていたんだもん！ 蒼く光つてたんだよ、連れて行って、ねえ外いこう！」

柔らかな黒髪を揺らし、地団太を踏む。既に外出用の帽子を頭にかぶり、準備万端だ。

ケイトは困ったような笑みを浮かべながらルースを見て、「仕方ない」と小さく呟き、短剣を手にとって笑ってみせた。

ルースの目の前に広がるのは、蒼い蝶の幻想とは程遠い、赤い海だった。

鼻を突く鉄の臭い、月夜に照らされ伸びる二つの影。

持ち主を失った短剣は血に沈み、鈍い輝きを放っている。

「お母さん……お母さん？」

か細い声で息絶えた母に呼びかけた。返事はない。

冷たい風……見守る三日月……。顔にかかる黒髪も気にせずに、自分とは少しも似ていない母を見つめる。

「お母さん、起きて、ねえ……ねえってば……」

血で固まった金髪に触れようとした瞬間、腹に衝撃と激痛が走る。蹴り飛ばされた小さな身体は無残にも地面に叩きつけられた。

苦しそうに咳き込みながらそれでも母を起こさなければ、と薄く目を開ける。

目に飛び込んだのは二つの影が母に手を伸ばしているところだった。  
やめて！！

かすれた声で叫んだつもりだった。

お母さんを食べないで！

黒い影 【人喰い】に訴えたつもりだった。

まだ母は生きている。生きているんだ……。

霞む視界、薄れる痛み。ルースは母を連れ去る【人喰い】を目に焼きつけ、意識を失った。

## 第一章 1

### 第一章 白

1

「はっ!!」

驚いた声を上げ、ルースは飛び起きた。広がる光景はもちろんいつもの自室。月明かりがが窓から差し込んで煌いている。

何か恐ろしい夢を見たような気がするのこれから実行しようとしている事の所為だろうか。

そんな思いを振り切るように首を振ると、ゆっくりとベッドから降りる。

時計を確認すると丁度起きたかった時間。乱れた長い黒髪を手で梳かしながら誰もいないリビングへ向かうと、ふと人影が目に入った。“ルースのクソ野郎”と真っ赤なペンキで落書きをしている双子のアイリーとソフィの姿だった。

二人はルースを見つけるや、慌てたようにキョロキョロし始める。まったく一緒に動きだ。

「あのバカ共っ!!」

ルースは強く拳を握り締め、窓に駆け寄ると勢いに任せて開く。

「こんな夜遅くにまで来るっ……うわああっ!？」

ルースが窓を開けた瞬間、二人は嫌らしい笑みを浮かべながら、手に持っていたバケツの中のペンキを全部ルースに浴びせた。

黒い髪だけでなく、顔も服も真っ赤に染められたルースは怒ることも忘れ、ただ呆然と立ち尽くす。

「ばーか、ルースのばーか!」

「いなくなっちゃえ、いなくなっちゃえ!」

二人それはもう楽しそうに笑いながら、仲良さげに手を繋いでその

場から走り去った。

窓からは冷たい風が吹き、部屋へ流れ込む。何処か遠くで狼が吼えている。

「はぁ……」

大きなため息をつき、ゆっくりと窓を閉める。滴り落ちる赤いペンキは何処か残酷で胸が痛んだ。

「あいつら何歳だよ……ほんと、子供みたいなことばかりして！」

痛みを誤魔化すように大声で言うと、ペンキが滴るのを気にせずに部屋に戻る。

どうせもう、今日限りの家。大切なものはバックに詰め込んだし、母の形見の短剣もしっかりと腰に装備した。

気づけばもう、母の年齢と一緒になってしまった。「お母さん」と呼びかけていた少女ケイトは17歳。当時は何も疑わずに呼んでいたが考えてみればおかしい話だ。

ふと、時間を確認すると針は1時を刺していた。

「や、やっぱ！！」

この家の思い出に浸っている時間も、ペンキを落とす暇もなく、ルースはバックを乱暴に手に取ると、玄関へ駆け出した。

お気に入りの茶色の靴を取り、それを履くとポタリ、とペンキが一滴靴に落ちた。

「あいつら……クソ野郎はどっちだ！」

再びこみ上げる怒りに負けないように、家の扉をゆっくりと開け、外に出る。深夜特有の冷たい風がルースを包む。

「さようなら、こんな、バカげたヤツらしいかない、最低など田舎！ 野望が達成されたらまず、この村を潰しに来てやる！」

決意を叫ぶと、はぁ、と小さくため息をつく。虚しくなりながら目を細め、ルースは家の正門をくぐろうとはせず、庭へと周った。

芝生の海が風に靡く。拓けた大きな庭は余計なものではなく、ただ先ほどの落書きだけが異質なオーラを放っている。

瞬く美しい星空に見守られ、ルースはバックの中にしまつてあつた古い本を取り出した。今にも朽ちそうな茶色の表紙。文字は既に擦り切れている。

ルースは壊れないように一枚一枚ページをめくりながら、目的のページにたどり着いた。

「あつた……」

嬉しそうに呟き、そこに書いてある魔法陣を指でなぞる。

「これが成功すれば……きつと【人喰い】を滅多打ちにできる！」どこから来るのかわからない自信がこみ上げ、それは笑みに変わる。もしものがあつたなら、地下へ行きなさい。

母 ケイトの声が蘇る。

一週間前。そう、丁度この時間帯。母の言葉が突然脳裏を過り、地下室の扉を開けてみたのがきっかけだった。長く続く暗い廊下。充滿する埃。

そこにただ寂しく置かれていた一冊の書。それを手に取った瞬間、ルースは何か不思議な感覚を覚えた。

暖かい、でも冷たい。怖い、優しい。書から流れ込む“感情”は本物だった。

薄れた文字、黄ばんだ紙。ただ、裏表紙に埋め込まれた真つ赤で大きな宝石は眠りから覚めたように美しい輝きを放っている。その宝石はまるで自ら光を放っているかのように眩しかった。

「悪魔をこの世に呼び寄せる……か」

胡散臭い説明。魔法陣を描いて血や肉をささげ、呪文を唱える。

一見簡単なように見える召喚方法。しかしその魔法陣というのが難解複雑の意味不明な模様であつた。

普通の人ならあきらめるようなことも、ルースはあの“感情”を信じ、今庭に立っている。

何度も紙に練習した魔法陣。夜中に出かけて材料調達。【人喰い】



に会わなかっただけ、運がいい。

短剣を抜くと、本を見ながら地面へと描いてゆく。描いた線を踏まないように気をつけながらただただ無言で進めてゆく。

土を裂く音だけが夜空に響き、すでにルースの身体を彩った赤いペンキは乾いていた。

「……よしっ！ できたあああ！」

描き始めてから約1時間。複雑で、大きな魔法陣が完成した。禍々しい蛇をかたどった模様、地獄へと続くような螺旋の線……。すべて練習どおりだ。

ルースはカバンから袋詰めした蝙蝠の羽を取り出し、それを魔法陣の中心に置く。

完成した嬉しさに思わずドキドキしながら時間を確認する。午前2時。丁度の時間だ。本のページをめくり、息を思いつき吸うと、

「マキラヴァ… ヴァ、ヴァイロロッキ、えっとリリアデットじ……ジ…… マキラヴリゼ…… ト……」

言いにくい呪文にルースが青ざめる。

（私…… 呪文の練習なんてしてなかったじゃん）

途切れ途切れの呪文を言い終わると、顔を上げて魔法陣を見る。もちろん何の変化もない。

諦めたように、魔道書を地面に落とす。

「失敗…… かな」

ぼつりと呟くと一気に現実を引き戻された。手についた埃を払いながら、魔道書を冷たく見下ろす。

この一週間の闘志が嘘のように引いてゆき、悔しさと恥ずかしさに頭を抱えた。

第一、悪魔なんているはずない。いたとしても召喚でなんて現れてくれるはずがない。

一瞬ではあったが夢を与えてくれた魔道書を手に取り、ページを開く。

「お母さんはこんなもので私が救われると思ってたのかな……」

「バカっ！」

魔道書が乾いた音を出して破ける。それを地面に強く叩きつけると、ページが数枚風に飛ばされた。

「バカ！ 最低っ！ 大嫌い！ もうみんな嫌い！ いなくなっちゃえ！」

今までの不満が暴言、涙と共に出てくる。罪はない魔道書にその言葉を浴びせると、怒り任せに踏みつけようとした。

瞬間

ルースは思わず目を丸くした。破いた魔道書の裏表紙……赤い大きな宝石がふわり、と宙に浮いた。

月光を反射させて輝く宝石はやがて、自ら白い光を放った。あまりにも神々しい光にルースは驚くのすら忘れ、見とれるように眼を細める。

その光は闇を照らし、ルースを包み、あたり一面真っ白になった。

今、立っているか座っているか、目を開けているか閉じているかもわからない状態であったが、妙な安心感が体中を駆け巡る。

やがて光はおさまり辺りにまた、暗闇が戻る。

気づけば、ルースの目の前には真っ白な服に身を包んだ真っ赤な髪  
の少年が魔道書のあった場所に立っていた。

まだ夜は長い。

相変わらず月は輝いているし、風も冷たい。

「……誰？」

目の前に立つ少年に声をかけるが、その声は風に掻き消された。

まるで王子のような品のある白い服に純白の白いマントが風に泳ぐ。陶磁器の肌に真っ赤な唇が映える。

燃えるような真っ赤な髪の間から見える漆黒の瞳は光の入る隙を赦さないような冷酷な雰囲気を放っている。

そして瞳と同じ色の水晶が胸元でキラリと光った。

「誰？」

ルースの声は少年に届いていた。自分にされた質問を復唱し、尻餅をつくルースを見下す。

「汚い」

吐き捨てられた言葉の意味を理解するのに時間がかかった。

その言葉が自分に向けられたのだとわかると、ルースはみるみるうちに顔を怒りに染め、

「し、失礼よ！ い、いいいくら何でもしよしよたいめんに！

」

「言えてない」

「なッ……」

少年の態度に拳を握り締めるが、諦めたように緩め、立ち上がる。

「あなたは……私が召喚した悪魔なの？」

「お前真っ赤だな」

「話を変えないで！」

強がるルースを見透かすように、一步、また一步と近づいてくる悪

魔。その黒い瞳に囚われたかのように少しも動けない。

悪魔はルースの手前で止まると、後ろを振り返った。

「なんでこんな魔法陣なんて描いたんだ？」

「き、きまつてるじゃないっ……」

喉を搾り出したかのような掠れた声。

恐怖で潰れた声で、

「あなたを……召喚する、ため……」

悪魔が馬鹿にしたように目を細める。そしてそのしなやかで細い指でルースの頬を包む。その暖かな手にルースは思わず目を見開いた。

「あ……」

悪魔の頭で何かが輝いた。目線を上に何かをみると、それは赤く大きな宝石だった。

金の縁で守られるように包まれた宝石。あの裏表紙の宝石だ。

悪魔の黒檀の如く黒い瞳がルースを捕らえて離さない。ただ、温かく優しい手の温度が頬に伝わる。やがて、ゆっくりとその手を下ろすと、

「お前があの本を破壊したことによって封印は解かれた。さあ、願いを言え」

「願い……契約ってこと！」

「ああ、契約だ……ただし」

「……ただし？」

悪魔が不吉な笑みを浮かべる。

「その願いが叶ったとき……お前の命をいただく」

「……！」

ルースは口を結び、手を下ろした。命……一瞬、躊躇うように悪魔から視線をそらす、すぐに向き直り、

「構わない！ こんな命……あっても無くても一緒。私の願いを叶えて」

肯定したかのような優しく甘い笑み。悪魔はペンキだらけのルースの髪を撫でた。

「私と一緒に【人喰い】を消滅させる旅に出て欲しいの！」

スパーン！

……夜空に響く痛々しい音。

「い……いつ……！」

悪魔に思いつき叩かれた頭を抑え、その場にしゃがみこむ。

「お前、何言ってるの？」

「え……え！？」

思いがけない反応に涙目で見上げると、怪訝そうに顔をしかめた悪魔が、腕を組みながら、

「【人喰い】を消滅？ お前が？ 面倒な奴だな。それとただの馬鹿か？」

悪魔が顔を近づけてくる。頭の方から靴先まで舐めるように見られ、ルースは身体を縮めながら、

「そ、そう。母を殺されたし、そろそろ人間が怯えないで生活できる環境にしなきゃなあって……」

「母？」

「正確には母代わりだった人なんだけど……私、拾われた子だったみたいで……」

悪魔の顔を伺いながら遠慮がちに言う。悪魔は不思議なものを見るような目でルースを見ながら、

「ふうん……【人喰い】、本当に消滅させていいんだな？」

「う、うん。それが私の願いだから！」

「……………」

長い沈黙。

悪魔は身動きせず、怯えるルースを見ていた。ただ冷たい風だけが二人を包んでは通り過ぎる。

やがて悪魔は次第に表情を変えた。一瞬黒い瞳を見開くと座ったままのルースに手を伸ばし、

「契約だ」

「え……いいの？」

「おもしろそうだな」

悪魔の言葉に不満を覚えながらも、その暖かい手を取り立ち上がる。  
「こっちは真面目なのに……で、契約ってどうするの？」

「手を貸せ」

悪魔はルースの手をぐつと引っ張ると手の甲をむけ、指を添えた。  
するとその指は一気に熱を帯び、ルースの手の甲は真っ赤に染まった。

「あ、熱い！ 熱いよ離して、嫌ッ！」

手を振り払おうとしても、ぴくりとも動かない。このまま振りほどこうとすれば、逆に肩が外れになるほどであった。悪魔が指を離せば、そこには痛みと焼けた痕が残っていた。

手の甲にはつきりと、文様。それは花のようにも太陽のようにも見える。

忙しく目をこすり、涙をごまかしていると悪魔が小さく「契約完了」と呟く。

「契約……もし、私の願いが叶えられなかったらどうするの？」

「それはない」

悪魔がきっぱりと言い切る。

「だからお前は俺に命を奉げる。これは必然だ」

「ああ……そう」

「それにしてもお前、汚いな」

悪魔はルースのペンキだらけの身体を見て言う。すでに乾ききったペンキはルースの身体、服、髪の毛にこびりつき取れそうな気配は一切ない。

「さっきちょっと、ね。もう家とさよならしたつもりだけど……お風呂に入って着替えてこようかな」

先ほどのことを思い出せば苦笑し、お気に入りの白かったプリーツスカートを引っ張る。さすがにこの格好で旅にはでられない。

肩を落とし家へ帰ろうと踵を返すと、悪魔が肩を掴んで、また向きなおさせる。

「その必要はない」

そう短く言っと、胸元の黒水晶がぼんやりと淡く輝きだした。それと同時に体中の赤いペンキも同じ光を放ち、次々に身体から離れて行った。

「えっ！？ えっ！？」と次々に宙に浮くペンキを一つ一つ見、そして黒水晶を眺める。ペンキはひとつに集まり、ゆっくりと水晶へと吸い込まれてゆく。

やがて何事も無かったように水晶の輝きが収まると、ルースの身体にはペンキ一滴残っていないかった。

「ねえ、今の何！？ 魔法？ やっぱ悪魔だからそういうことできるの？」

興味津々に質問しながら悪魔の真っ白な、王子の召し物のような、気品あふれる服を掴もうとしたが、ひらりと身をかわされ、

「生き物は吸収できないがな」

「なるほど、だから私は吸い込まれなかったんだ」

「お前の命を奪ったらその身体を吸収させてもらう」

「……」

「しかし腐った田舎だな」

悪魔が目だけを動かし、この栄えているとはいえない村を見る。

「まあ……だからなかなか【人喰い】に目を付けられないし……そのせいで村人を守ってくれる騎士もいないけど」

悪魔はルースを覗き込むように顔を近づける。人形のように白い肌は艶があり、思わずドキリとした。

「な、何……？」

「ブスだな」

「うるさい！ っ！ ちょっと、避けないで、殴らせて！」

「ルース」

「……！」

悪魔の気だるげな声。しかしはつきりと名前を呼ばれたルースは殴るうつとして振り上げた腕を下ろす。

「契約したときに少し、お前の記憶を覗かせてもらったが……そうか、【人喰い】に復讐か」

何かを考えるように形のいい赤い唇に指を当てる。やがて考えがまとまったのか手を下ろし、

「ジーマ」

「え？」

「ジーマと呼べ」

「ジーマ、ね。よろしく。じゃあ……出発する？」

「嫌だ」

「な、なんで！」

予想外の返答に慌てる。ジーマの意思は固く、その場で腕組して動こうとしない。

「夜中のうちにこの村でたいの、ねえお願い、ねえっんぐぐ！？」

真つ白な手を翻し、ルースの口を押さえる。そして人差し指をルースの眉間に当てると、

「寝ろ」

淡く輝きだす指先。身体に流れ込む暖かな何か。ルースはゆっくりと目を閉じ、その場に崩れ落ちた。



「んー……いったあ……い……？」

眩しい日差しが降り注ぎ、朝露が宝石のように輝く。小鳥が唄う朝。ルースは背中の中の痛みで目を覚ました。

まだはつきりとしめない意識だが、なにか赤いものが覆いかぶさるように覗き込んでいる。

「だ、だれ！？」

勢いよく起き上がると背中が軋んだ。硬い地面で寝ていたのだから当たり前のことなのだが。

目を擦り瞬きすると、そこにはルースの黒い日傘を差して座っている王子がいた。ふと自分の荷物を見ると、中身が散乱している。

「……ジーマ？」

「あたりまえだろ。それよりあれを何とかしろ」

ジーマの視線の先には、たくさんの女たち……村中の女性が道に集まり二人のやり取りを憎しみを込めた視線で見つめていた。

その中にはあの双子……アイリーとソフィもいた。

「俺が動かたばに悲鳴をあげるし、お前に何かするたび雄たけびをあげる。なんなんだ」

イライラしたような表情。しかしもっているかわいらしい日傘でその怖さは半減している。

「気持ち悪い」

ジーマが言葉を吐き捨てる。その横顔を見ながら、

「ほら、ジーマ美形……だから、みんな羨ましいんだよ。ま、私はそうは思っていないけど！」

「俺程度で美形なら人間は相当なブサイクだな。醜い妖怪だな」

そついいながらジーマは立ち上がり、座っているルースの後ろに回

る。何をされるのかと大人しくしていると、ジーマはいつのまにバツクから取り出したルースの櫛を使って黒く長い髪を梳かし始めた。周りから嫉妬の混じった悲鳴が上がる。

「え、ちよつと……何してるの？」

「見てて鬱陶しい」

ルースの髪の毛を高く二つに結び、立ち上がる。結ばれた髪を触ってみると、自分で結ぶよりもずつと上手だった。

「ありが、とう？」

「ちよつとちよつとちよつと……！」

ふと声がしたほうを向くとアイリーとソフィがこっちに向かって砂煙を上げながら走ってくる。ルースの目の前で止まると、鬼の形相で、

「このお方は誰！」

「誰！」

「誰って聞かれて答えられるもんじゃない！ あつちいけ！」

「生意気！」

火花が飛び散りそうなくらいの睨みあい。ジーマは冷めた視線を向けたが、散らかしたバツクの中身を整頓し始めた。

「なんで田舎に王子様がいるの！」

「なんでルース仲良くなっているの！」

二人に加勢するように、後ろの集団からも野次が飛ぶ。

今まで冷たくされた分、まずはここで復讐しなければ、という思いがルースにこみ上げ、

「ジーマ！」

「ん」

「呼び捨て！ 生意気！」

「生意気！」

「ジーマ、抱っこ」

両手を広げる。周りの空気が一瞬にして凍りついた。周りの女達の表情は引きつり、双子はあんどりと口をあけている。

（あれ……失敗した？）

呆れたように見下ろすジーマ。苦しい沈黙。

双子は顔を見合わせ、女達はヒソヒソと何か会話している。

この嫌な空気を壊したのはジーマの一言だった。

「しょうがないな、ルース、おいで」

まるで恋人にのうな優しい声。しかし表情は硬い。ルースは慌てて立ち上がるとジーマに抱きついた。一瞬だけジーマは嫌そうな顔をした。しかし女達には効果絶大で、野獣のような咆哮をあげるものもいれば、シヨックで顔を覆うものもいた。

双子はその場に座り込み、大嫌いなルースを睨む。

ざまあみろ、といわんばかりに双子に舌を突き出し、ジーマの手から自分の日傘を奪うと、

「ジーマ行こう、もうこんな村早く出てやる！」

ジーマの手を握り、抱かれたまま進む方向を指さす。ルースの命令通りジーマは歩き出す。表情は見えないがきつと嫌そうな顔をしているだろう。

二人を見送るのは、女達の悲鳴と双子の憎憎しい視線だけであった。

「そろそろ離してくれないか」

村を離れてから数時間。草原に一本だけ伸びる砂利道をひたすら歩いていた。時間は既にお昼を過ぎていて、太陽が照りつける時間帯だ。

ルースは可愛らしい黒の日傘を差し、ジーマの手をひっぱり無言で道を突き進んでいた。大人しく付いてきていたジーマが口を開いたかと思えばその言葉だった。

「あ、ごめん。つい……」

「なにがつい、だ。どんだけ繋いでれば気が済むんだ、ブス」

最後の一言にむっとしながら振り払うように手を離すと、

「そういう割にはノリノリだったじゃん。抱っこのときとかさ！」

「空気を読んだただけだ」

悪魔のくせに……という言葉が喉まで競りあがってきたがぐっと飲み込んで、

「しかし暑いねえ、私、太陽は苦手でさあ」

日傘をくるくると回す。バックから白い帽子を取り出しかぶり、

「日焼けとかも嫌だしね。女の子だもん。外で遊ぶのは大嫌い！」

「いじめられるのが嫌で引きこもってただけだろ」

凶星。ルースは口を閉じる。

長く長く続いた道は終わりを迎える。二手に分かれていた道を左に進むと、あの田舎よりは栄えている町へと到着した。

家が立ち並ぶ住宅街にはおいしそうな香りが漂っている。空はもう赤く染まり、こうもりが滑空している。

そういえば、こうもりの羽の袋詰め、庭に置きっぱなしだなあ、と考えるながら町へ入ると、ジーマが肩を叩いてきた。

「何？」

「人間には住みかが必要だろう」

「瞬何を言っているのかわからなかったが、ぽんっと手を叩いて、

「ああ、宿のこと？」

「そういうことだ」

「考えてないよ。野宿かな！」

「お前は死にたがりだな。いつ【人喰い】が来るかわからないのに」

「だって、ジーマが守ってくれるんでしょ？　それも契約なんですよ？」

ジーマが顔をしかめる。さも当たり前のように言うルースにデコピンを食らわすと、

「調子に乗るなブス」

「いつ……いい！？」

額を押さえ痛がるルースを担ぎ上げ、ジーマは町へと足を進めた。買い物に出歩いている主婦や子供、仕事帰りの男性、全員がどこか驚いたように、不振そうに二人を見て、そしてジーマの精巧な作りをした顔に小さくため息をつくのだった。

「離して、ねえ、恥ずかしいから！」

両足をバタつかせ必死に抵抗を試みるも、ジーマは少しも腕の力を緩めない。

されるがままに連れて行かれたところはあるひとつの家だった。大きくもない、だけど小さくもない普通の家。

住宅街はとうに過ぎ、どこか寂しい印象を感じさせる場所に建っていた。

「ここに泊まる」

「ええ！？　そんな急に！」

ジーマは睨みつけるようにその家を見上げる。嫌がるルースをいだき、ドアをノックした。

家からは女性の返事が聞こえてきた。足音が近づき、扉が開く。

「……あら？」

茶色の髪の毛をゆるく結んだ若い女性が顔を出した。白いエプロンを着用している。

女性はまず担がれているルースの足を見て驚いたように目を見開いた。そして担いでいる少年、ジーマを見るとさらに手で口を覆った。

「泊める」

「え!？」

「ちよつとジーマっ！ あ、あのごめんなさい、本当にごめんなさい！」

足をバタつかせながらジーマの無礼を謝る。しかしジーマは鋭い視線で女性を見ながら、もう一度「泊める」と言った。

すると女性はおかしそうに笑い、扉をすべて開け、

「旅人さんかしら？ 夜はいつ【人喰い】が襲ってくるかわからないものね。お上がりなさい」

優しい笑みだった。ジーマはやつとルースを下ろすと、遠慮もなしに部屋へとあがって行った。

その後ろ姿を見ながら、ルースは泣きそうになって、

「本当にごめんなさい！ あんな無礼で、失礼で、しかも突然泊めるだなんて、えつと、えつと」

「大丈夫よ、落ち着いて」

女性はやわらかく微笑み、安心させるようにルースを抱きしめる。

「待っていたのよ、今ご飯を作ろうと思っていたの。丁度いいわ」

「は、はあ……」

抱きしめられ、緊張しながら返事をする。ふと視線を感じ正面をみると、ジーマが真っ黒な瞳で二人を睨むように見ているところだった。

「そろそろ夫が帰ってくる時間だと思っただけ」

リズミカルな音にあわせ、野菜が細く切られていく。ぐつぐつと煮込まれているシチューからは食欲をくすぐるいい香りが立ち上っていた。

ルースは椅子に座り、楽しそうに顔を綻ばせながら女性　　リリイを見つめる。

「リリイさんの旦那さんは何の仕事をしてらっしゃるんですか？」  
「騎士よ」

「【人喰い】からみんなを守る？」

「そう、それよ。家に帰ってからもずっと剣を磨いてるの」  
「かつこいい！！　ねえ、ジーマもそう……」

ルースは瞳を輝かせる。ジーマに話を振ろうと振り返った瞬間、思わず息を呑んだ。

美しい毛皮で作られたソファにどっしりと座り頼杖。物憂げに目を細め、人形のように動かない。

本当に何処かの国の王子のように感じ、見とれていたがぶんぶんと首を振って、

「ジーマ、そこどきなさい！　汚したらどうするの！」

「いいわよ、ルースちゃん。私たちが座るよりもジーマ君が座っているほうが椅子も嬉しいと思うわ」

「そんなことないです！」

ルースは椅子から降りると、ジーマの目の前に立ち、頼杖をつく腕に手をかけぐいぐい引つ張る。

「こっちの椅子に座りなさい！　さもないと怒る……」

ルースの目にきらりと光るものが飛び込んできた。その正体を探すと、ひとつ小さな写真たてが目に入った。ジーマから手を解き、写真たてに手をかけようとした瞬間。

「ご飯、できたよ」

ぽんつと肩に手が置かれる。驚いた勢いで振り返ると優しい笑みを浮かべたリリイの姿が目に入った。  
と、同時に玄関からの物音。

「あ、はい」

返事をして椅子へと戻ると、鮮やかな野菜、温かなスープにパンが並べられていた。久しぶりのちゃんとした夕食にルースの心も踊る。「ただいま……あれ？」

身長の高い男性。澄んだ緑の瞳を丸くし、小さな来客に戸惑いを隠せない。

黒髪の女の子、そして毛皮の椅子に座る少年。一瞬作り物かと思っただ、目が合ったので小さくお辞儀をする。

「デリク、お帰りなさい。今日は可愛らしいお客さんがいるのよ」夫、デリクの椅子を用意しながらリリイが楽しそうに言う。デリクはまだ状況が理解できていないのか、ルースとジーマを交互に見ながら席に着いた。

「すいません、今夜一日だけお泊りさせてください！」

ルースが深々とお辞儀する。デリクは助けを求めるかのようにリリイに視線を送った。

「旅をしているみたいだね、今日一日泊めてあげることにしたのよ。いいでしょ？」

「ああ、なあんだ。そういうこと。いいよ、俺はまたすぐに仕事に行くけどね」

と、快い笑顔を見せるとリリイが用意したお酒に口をつける。

「ジーマ君もこっちにいらっしやい。ご飯一緒に食べましょー！」

ジーマは首だけをリリイに向けた。おいしそうな夕食には目もくれず、

「食べなくても平気だ」

「食べなきゃだめよー。せっかく作ったんだし……それともその椅子がおきに召しましたかあ？」

からかう様な口調で言いながらお盆にジーマの分をのせ、運ぶ。ジーマの前に小さなテーブルを用意し、そこに夕食を置くとスプーンでシチューを掬って、

「はい、あーん」



「やめろ」

「楽しそうだなあ」

デリクが懐かしむように呟く。その発言に不思議そうに見つめるルースの視線に気づくと、

「心から楽しそうなりリイを見るのは久しぶりだなあ」

「そう……なんですか？」

「うん」

酒を口に含む。どこか嬉しそうにリイとジーマのやり取りを身ながら、

「僕たちには子供がいなければ、君たちが着てくれて嬉しいんだろ」

子供がいない。その言葉に自分の親がいなかった環境を重ね合わせる。

ケイトが生きていたら、もし、両親が私を育てていてくれたら、こんな感じだったのだろうか。

答えの出ない問いに苦笑しながら、シチューを口に運ぶ。ジーマは仕方なく食べさせてもらっていた。似合わない光景に思わずシチューを噴出しそうになった。

「ごちそうさまでした！」

用意されたものをペロリと平らげ、満足そうなルースの表情をみて、リイも嬉しそうに微笑み食器を片付ける。

デリクは既に仕事へと戻っていた。出されたものの半分も食べないまま急いで家から出て行ってしまった。

結局ジーマは最後まで食べさせてもらっていて、今は不機嫌そうに椅子に座りながら外を見ている。

「そうだ、ルースちゃん。お風呂にいつてきなさいな」

「えっ、いや、私お皿洗います！　ただ泊まるだけなんて申し訳ないですし……」

「いいのいいの、ルースちゃんにそんなことさせられないから！」  
「ダメです！ お手伝いさせてください！」

「大丈夫よ。今ならいい湯加減だから、明日に備えてゆっくり浸か  
つてきなさい。そのドアを開けて少し進めばお風呂場あるから」  
リリイが食器を洗いながら言う。器用に手を動かしながらルースに  
笑顔をみせた。ルースは「じゃあ……お先に失礼します」と微笑み  
返すとドアを開けて風呂場へと向かった。

リビングには食器がぶつかる音と水が流れる音だけが響いていた。  
相変わらずジーマは椅子から動こうとせず、外を眺めている。

「ねえ、ジーマ君」

リリイが口を開く。ジーマは少しの反応も見せない。

食器を洗い終わり手を拭きながら、リリイはジーマの隣に座った。

ジーマの冷たい横顔にどこかつとりとした表情を見せ、

「ジーマ君は何処かの国の貴族かしら？」

「……」

「髪の色も異質だし……肌も白いし……外国から来たのかしら？」

「……」

「何で二人で旅してるの？」

その言葉にやっと、人形の動きのように不自然にぎこちなく首を動  
かし、リリイと見詰め合う。

真夜中のような黒い瞳に星は見当たらない。残酷なその視線は殺気  
に近いものを放ちながらリリイを見下ろす。

「お前には関係ない」

「……」

「だがひとつだけ教えてやろう。答えは存在しない」

ジーマの言葉をきよんとしながら聞いていたリリイはやがて俯き、  
いつもの優しい笑みを浮かべて、

「関係なくないわ。それに、【人喰い】が蔓延る世界で旅なんて危  
険よ。いっそ……」

リリイはその緑の瞳を細め、壊れ物に触れるかのようにジーマの頬

に手を伸ばすと、

「ここに住んでもいいのに……」

どこか寂しそうなその表情をジーマは冷たく見下ろす。

「随分寂しそうな顔をするんだな」

「そりゃ寂しいわよ。夫はすぐに仕事にいくし……いつもひとりで寂しくて死んでしまいそう」

「それは嘘だ」

頬に添えられたリリーの手をやんわりと振り払う。

「お前は楽しくて楽しくて仕方がない」

「今はそうよ。ルースちゃんとジーマ君がいるんだもの」

リリーはゆっくりと立ち上がり、ぽんぽんと服のしわを払う。キツチンへ戻ると皿を拭き始めた。

「ふう……気持ちよかったですあ！」

ドアが開いたかと思うと紅に染まった頬を拭きながらご機嫌な様子でルースが帰ってきた。

濡れて艶のある黒髪から滴る雫を拭きながら、

「気持ちよかったです！ 用意されていたパジャマお借りしてます」

「早かったのね」

「長く入ってるとのぼせちゃうので」

「そうなの。ジーマ君、次お風呂いいわよ」

「入らない」

「入らない？ お風呂嫌いなのか？」

ジーマはそれ以上答えなかった。頬杖をつき、足を組み、見向きもしない。リリーは苦笑し、「じゃ、私入ってくるわね」とルースに告げるとドアを開け風呂へと向かった。

リリーが風呂へ行ったことを確認すると、ルースは眉をきりきりと吊り上げ、だんまりを決めるジーマへと大またで近づき、

「ちよつとジーマ！ あなたさつきからすつごく失礼じゃない！？ 見てて呆れるよ、礼儀がなってない！」

聞こえているのかいないのか、ジーマは外に視線を向けたままピク

リとも動かない。

「ねえ、聞いてるの!」

怒鳴るように言うとジーマの頬を思いつきりつねった。形のいい輪郭は歪み、赤い唇が伸びた。

ジーマの黒い瞳が動いた。どこかに吸い込まれてしまいそうな深い闇に恐怖を感じ、ルースは思わず手を離れた。

「許せない」

「ご、ごめん、でもジーマも悪いよ!」

「俺はお前の【人喰い】を消滅させる、という願いと契約があるから今ここにいる」

死者のような空虚な瞳が一瞬だけ輝いたように見えた。

「お前の願いは叶える。だが、俺は俺のやりたいこともやらせてもらおう」

強い意志　いつもの冷たい表情が崩れる。ルースはなにを考えているかわからないジーマの横顔をただじっと見つめていた。

時はもうすぐ日付が変わる時刻。

「やつふー！」

ぽふつと軽い音を立ててベッドに飛び乗る。ふかふかの白い布団が波打つ。

肌触りのいい枕に頬をこすりつけながら、

「ベッド1つだけど……」

「俺は寝ない」

「あ、そう？」

やつぱり悪魔は寝ないんだ、と納得しながらジーマを見る。ジーマは部屋の隅に胡坐をかいてベッドと戯れるルースを見ている。

「やつぱ夜のほうが調子いいの？ 悪魔だし」

「……人間は妄想が大好きだな」

「どういうこと？」

ルースが問うとジーマは気だるそうに目を細め、

「朝が苦手、とか寝なくても平気、とか、勝手に妄想されるこっちの身にもなれ」

「へえ……人間の想像と実際の悪魔ってやつぱり違うんだ……」

「うるさい、さっさと寝ろ」

「いやあ、それがさあ。私夜型なんだよね！」

ルースが枕を抱きしめながら得意げに言う。

「読書とかも夜のほうが集中できるし、なんかこうやる気がでるっていうか。で、いろいろやってると結局朝になっちゃうってことがよくあってね」

「それはお前がだらしないだけだ」

「そんなことないよ！ 朝型もいれば夜型もいる。だからもうちょ

つと……起きてジーマと話したいなあって」

「……」  
「ほら、私たちお互いまだ知らないことだってあるから、この機会に……」

「俺としては早く寝てもらわないと困る」

ジーマが腰をあげ、電気を消す。不満そうな顔をするルースの隣にいきベッドに腰を下ろした。

月明かりに照らされたジーマの肌は青白く、とても不健康そう。だが不思議な魅力を放つ、精巧な顔だった。

「私と話すの、面倒？」

母以外の話し相手。ジーマの顔色を伺いながら不安の籠った声で聞く。

「お前と話すことは契約内容ではないからな」

「……」

いい返事を期待していたわけではなかったが、ジーマの言葉に俯くふと、額に触れられ顔をあげた。

ジーマの指先は淡い輝きを放った。その光が収まると同時にルースはジーマの胸に倒れこんだ。規則正しい寝息をたてている。

ジーマはゆっくりとルースを寝かせると毛布をかける。月明かりを遮るように立ち上げれば静かに歩き出し部屋をでた。

足音を立てずに階段を下りる。リビングはもちろん、どこも電気は灯っていない。

ジーマは迷わず風呂場へと足を進めた。そして洗面台。薄明かりの中で鏡と向きあう。真っ白な服に身を包んだ自分と目が合うが、ジーマが手をかけたのは鏡の下にある小さな棚だった。

それを音を出さないようにゆっくりとずらすと、人一人ぎりぎり入れるか入れないかの扉が現れた。それは頑丈な鎖と南京錠で閉ざされている。

それに触れるとかちやり、と無機質な音が静かな空間に響いた。硬く閉ざされたそれを指と指で挟むと、鎖は真っ赤になりどろりと溶

け出した。ジーマの指を舐めるように滑り、床に垂れる。床は焦げ、穴が開き細い煙が立ち昇った。

そつと鎖を解き、扉を慎重に開く。現れたのは暗闇へ続く長い階段だった。異臭を放つそこは、家の雰囲気とまったくの逆。

中に入り扉を閉じる。中は意外に広く、立つてもまだ天井との距離に余裕があつた。人間では光なしで下れないほど急な階段をコツコツと音を立てて下ってゆく。

しばらく下ると、長い階段は終わりを迎えた。通路の突き当りにはまた扉が……頑丈な鉄のそれが聳え立っていた。

ジーマは迷いを見せずに扉へと突き進めば、同じく鉄でできた大きな南京錠を手で包み込んだ。それは溶岩のように流れ落ち、地面に塊をつくる。

無防備になつた重い扉を開く。

「ひっ！！」

小さな声が聞こえた。

奥に見える薄汚れた塊が小刻みに揺れている。数名の少年少女が身を寄せ合つて震えていた。ジーマが近づくと余計に身体を震わせた。ぼろきれ一枚を身に纏い、骨が浮き出るほどに痩せている。手には手錠、足には足枷、肌とそれらが擦れて真っ赤になっている。

「おい」

聴きなれない声に、彼らが一齐に顔をあげる。その目の前には白い服を纏つた美しい少年が闇の瞳で見下ろしていた。

「……誰？」

一人が小さくかすれた声をあげた。

「君も……捕まっちゃったの？」

乾いた瞳をジーマに向け、問いかける。彼らはまだ突然現れた少年に戸惑いを隠しきれないようで、抱き合いながらジーマの冷たい視線に怯えていた。

その問いには答えず、ジーマは汚れた地面に膝をついた。彼らの足枷に手をかけると先ほどと同じように溶かして壊す。

魔法のような出来事に彼らは驚き、目を丸くするが、軽くなった両足を不思議そうに見つめた。自由になった両足をゆつきり動かし歓喜に顔を綻ばせる。

「お兄さん、助けに来てくれたの？」

「手を出せ」

言われたとおりに手を差し出した少年の手錠を溶かす。

「ねえ私のも溶かして！」

「お兄さん、魔法使いなの？」

目の輝きを取り戻した彼らは、立ち上がりジーマを囲んだ。丁度ジーマのお腹あたりに彼らの頭が来る。

一人一人の手錠を溶かしながら、ジーマは氷のような表情で扉を見た。

「なにをしているのかしら？」

酷く冷たい声。その場の賑やかだった雰囲気は一気に凍りついた。

子供たち全員が扉のほうを向く。

そこには、目を見開き、微笑んでいるリリイがいた。しかし、先ほどの優しい笑みではなく、狂気に満ち溢れた微笑。

その両手には縛られたルースが抱かれていた。相変わらずすやすやと眠っている。

「なにをしているのかしら？」

リリイがもう一度言う。子供たちは青ざめ、声すらも上げずにその場に崩れ落ちた。

「ルースちゃんとジーマ君もね、私の“子供”にしようと思ったんだけどね、リカルドの部屋にジーマ君がいなかったから。とりあえずルースちゃんだけを連れてきたの。よく眠っているわ」

リリイは首を傾げた。

「鍵がね、ぐちゃぐちゃに溶けてて驚いたの。どうやったのかしら？」

「一步、一步、狂気が近づいてくる。子供たちは逃げることにすらできずに、カタカタと震え始める。」



「ジーマ君は何を聞いても答えてくれなかったけど、さすがに答えてくれるわよね。どうしてここがわかったのかしら？」

「町に入った瞬間からわかったさ」

ジーマが即答する。リリイは意外そうな顔でジーマを見つめた。

「死神に憑かれた家か……不吉で嫌なマイナスの存在を感じた」

「そう、残念」

リリイとジーマの距離は手を伸ばせば届くほどになった。ジーマよりも頭ひとつ分ほど高いリリイはジーマを見下ろし、ニタリと笑った。

「ジーマ君、綺麗な顔してるじゃない？ だから、特別に一番可愛がってあげようと思ってただけ」

「お前に可愛がられてもまったく嬉しくない」

「照れやさんなのかしら！」

リリイが長い両腕を伸ばし、ジーマに掴みかかる。ジーマはその腕を掻い潜り、離されて地面に落下しかけたルースを抱きとめ、後ろへとまわる。

子供たちの短い悲鳴。リリイはゆっくりと振り返る。あの優しい笑みを浮かべていた顔とは想像もつかないような恐ろしいほどに不気味な形相を浮かべていた。

もはや後ろで震える子供たちには興味がない、とでも言わんばかりにいまだに眠るルースを抱きかかえる作り物のような少年を見つめ、うつとりとため息をついた。

「かわいい私の子！」

「リカルド、とはお前の子供のことか」

リリイの表情が強張る。

「あの写真たてに飾られていた写真。随分と小さく、痩せた子供だったな」

「……」

「お前の愛は酷く歪んでいる」

見透かすような漆黒の瞳……リリイの顔に一瞬、焦燥の色が見えた。

ジーマは薄く笑い、続ける。

「この嫌な臭いはこの部屋に眠るお前の息子の臭いだな。もう少し奥にでも行ったところに座っているんだろう。嫌な母親だ。町の子供も連れ去り、同じ目に合わせている……。わかつている、その子供たちの誰一人と血が繋がっていないことも。お前の夫と一緒にやっていたことも。デリクにも同じ臭いが染み付いていたからな」

「なんでも知っているのね。あなたは神様だったの？」

リリイがポケットに手を入れる。ジーマはその行動を静かに見つめる。

「なにか不思議な力でも持っているのかしら。さすが……。私の子！」不吉な笑みを浮かべたかと思えば、手には銀にきらめくナイフが握られていた。それをジーマに投げつける。それはジーマの髪を掠り、壁にぶつかり無機質な音を立てて床に落ちた。

「はずれ。残念だったな」

乱暴にルースを担ぐように持ち直し、背を向ける。

「お前ら」

ジーマの言葉に、子供たちがピクリと反応する。

「朝になったら、逃げろ」

それだけを言うと、開かれたドアへ向かって駆け出した。

「待ちなさい！」

リリイが後を追いかけてくる。それを確認すると一気に階段を駆け上る。何十にも響く足跡。咆哮をあげるリリイ。手に持ったナイフが獣の瞳の如く危険な光を放つ。

やがて暗黒の階段は終わりを向かえ、薄明かりの洗面台へと脱出する。すぐ近くの窓を開き、そこからふわりと飛び降りる。

「午前二時二十三秒……」

ジーマが今の時刻を呟く。窓から離れ、近くの木下にルースを寝かせ、いまだに起きる気配の無いルースを縛るロープを解く。自身のマントをはずし、ルースにそつと覆いかぶせる。

「んふふふふふ」

楽しそうな笑い声。リリイが窓から地面へ降りた。手には斧が握られている。

「悪い子ねえ。悪い子はお仕置きねえ。」

壊れたマリオネットのような奇妙な動き。月明かりに斧が禍々しい輝きを放つ。

ジーマはルースからゆっくりと離れた。それにあわせてぎこちない動きで方向転換したリリイに、

「しょうもないダメ人間……。お前をここで掃除してやる」

低い声。地の底から響くような、いつものジーマの声じゃないそれにリリイの動きが一瞬止まる。

黒い輝きを放つ胸元の水晶。それにそつと指を添えた……。刹那。

ズル……ズル……

微かに聞こえた音。ジーマの動きが止まる。

ズルズル……ズル……

何かが引きづられている。リリイはその音に気づかないのか、動きの止まったジーマをみてにんまりと笑い、ゆっくりと、ゆっくりと近づいてくる。

ふと家の角の影が動いた。何かを引きずるそれが姿を現したときジーマは目を見開き、近寄るリリイに叫んだ。

「危ない！！ 避け」

リリーの体は二つに裂かれ、血が噴水の如く噴き出した。落下する上半身に崩れ落ちる下半身。その後ろに現れたのは真つ黒な人影。その片手には見覚えのある顔……恐ろしい形相で息絶えたりリーの夫、デリクだった。

「【人喰い】か……」

ジーマが呟く。

【人喰い】は大きな袋を取り出し地面に広げると、二つになったリイを入れ始めた。

その行動が終わるとゆっくりとジーマの方を向く。ロープで顔は確認できない。

「お前も殺されたいか？」

【人喰い】の問いかけ。それにジーマは鼻で笑う。

「俺は殺されない。むしろ今からお前を殺す。だが、その二人の死体をここに置いて死んでもらっても困るからな。今日は見逃してやる」

「よくしゃべるクソガキだな」

【人喰い】がロープの中から鎌を取り出す。その様子はまるで物語の死に神をみているかのよう。ジーマはさらに続ける。

「お前に勝ち目はない。今は死体の処理を優先するんだな。明日の夜中にでも相手になつてやる。今夜は最後の晩餐でも楽しむんだな」二人の死体を見て笑う。その様子に【人喰い】は舌打ちして、

「そうか明日か。ならばお前は明日の夜中まで精々生にすがりつくんだな」

そういつて【人喰い】は踵を返した。

二つの死体を引きずりながら消えた【人喰い】を見送るとジーマはぐっすりと眠るルースを抱き上げると、家を一瞥しその場を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6573j/>

---

Baroque white n.m

2011年10月6日00時54分発行